

割栢健史¹⁾, 松嶋淳²⁾, 清水道生²⁾, 長嶋洋治³⁾, 村田晋一¹⁾
(和歌山県立医科大学人体病理学教室¹⁾, 埼玉医科大学国際医療センター病理診断科²⁾,
横浜市立大学大学院医学研究科分子病理学³⁾)

【症例】

21歳, 女性

【病歴】

2011年11月に右側腹部痛が生じ, 画像検査にて右腎腫瘍が指摘された。その後の経過観察中に増大傾向がみられ悪性腫瘍が疑われたため, 2013年2月に腹腔鏡下に右腎摘除術が施行された。

【病理所見】

肉眼的には, 47×39×28 mmの線維性被膜を伴う比較的境界明瞭な黄白色調充実性腫瘍であった。

組織学的には, 腫瘍の大部分は境界明瞭腫瘍であったが, 一部で周囲腎組織への浸潤性増殖がみられ, 小娘結節を伴っていた。腫瘍は, 管状及び乳頭状構造で構成されており, 比較的均一であった。腫瘍細胞は, 密度が高く, 細胞質に乏しく, クロマチン濃染を呈する橢円形核を有していた。核分裂像が散見された。間質に泡沫細胞集簇が散見された。

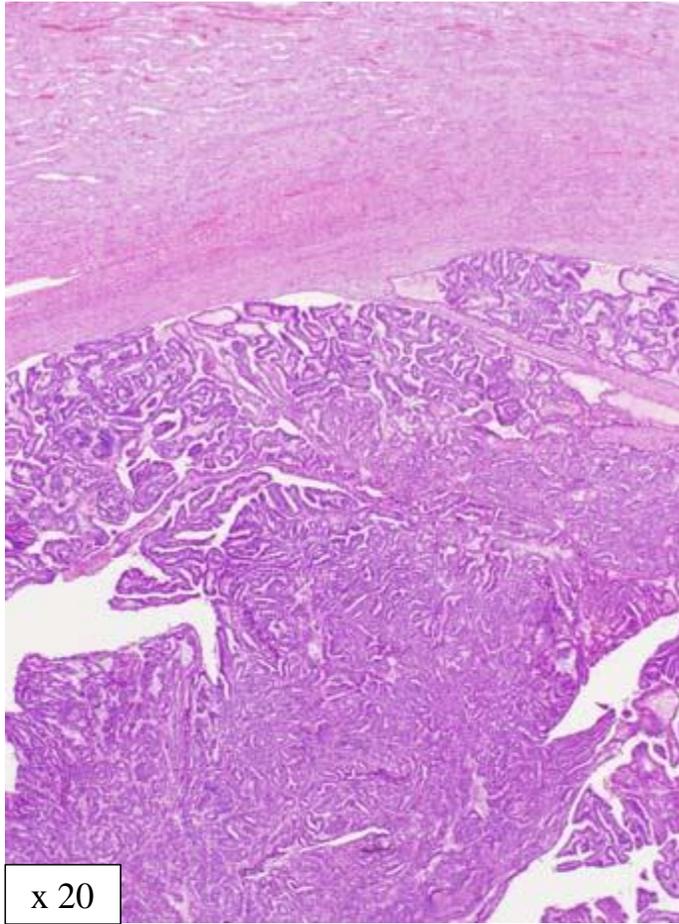
免疫組織化学的には, WT-1はびまん性陽性, CD57は散在性に陽性, CK7は陰性であった。

【配布標本】

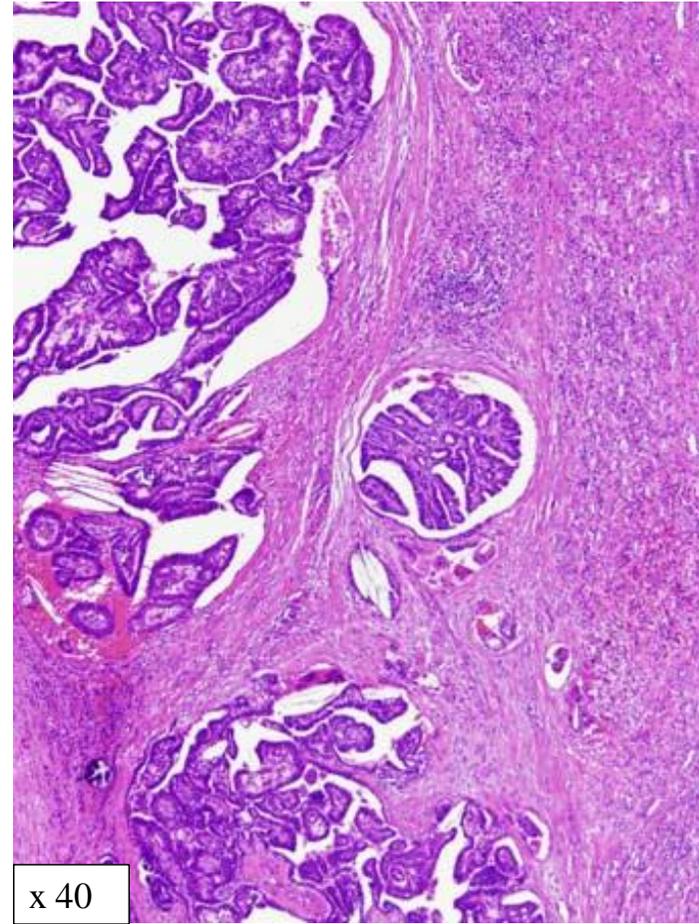
右腎腫瘍摘出標本の最大剖面

【問題点】

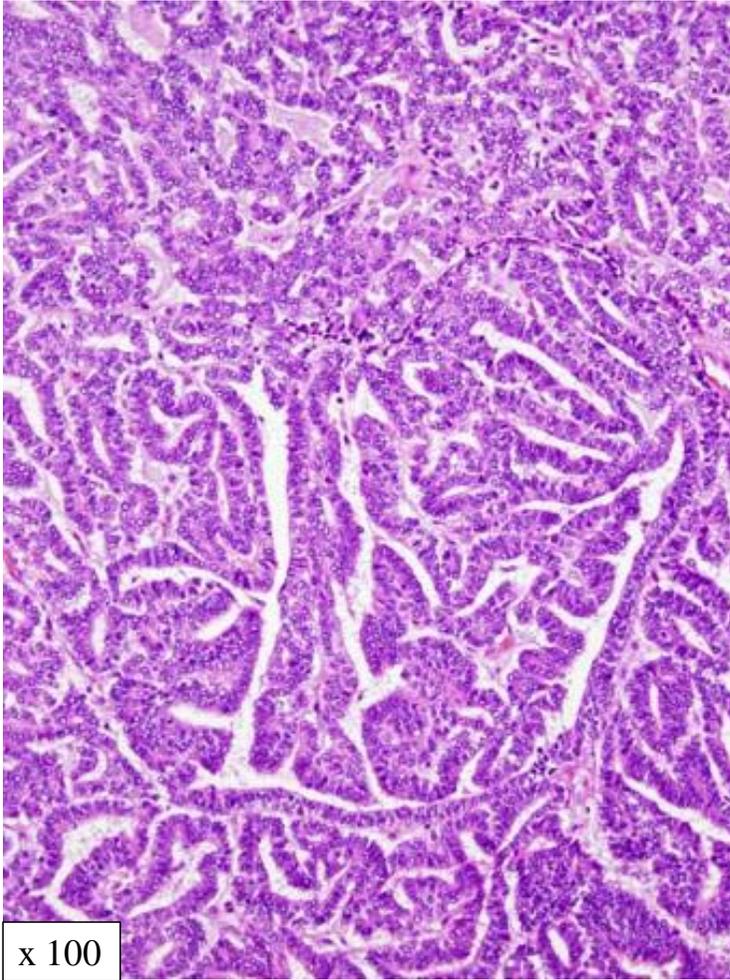
病理組織学的診断



大部分は境界明瞭

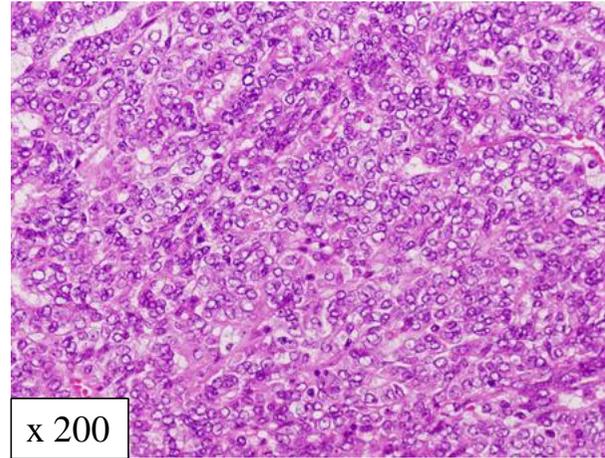


一部に浸潤性増殖



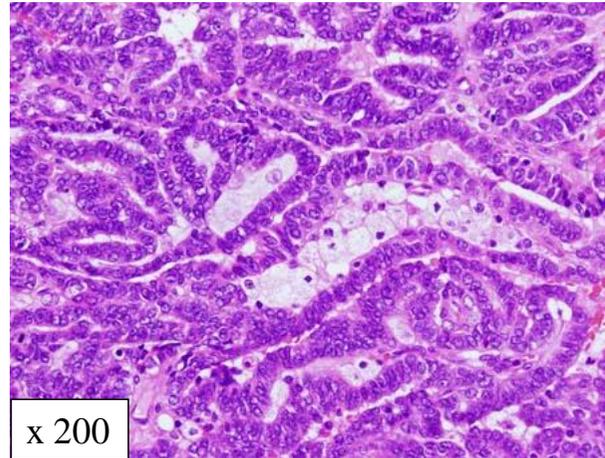
x 100

管状及び乳頭状構造



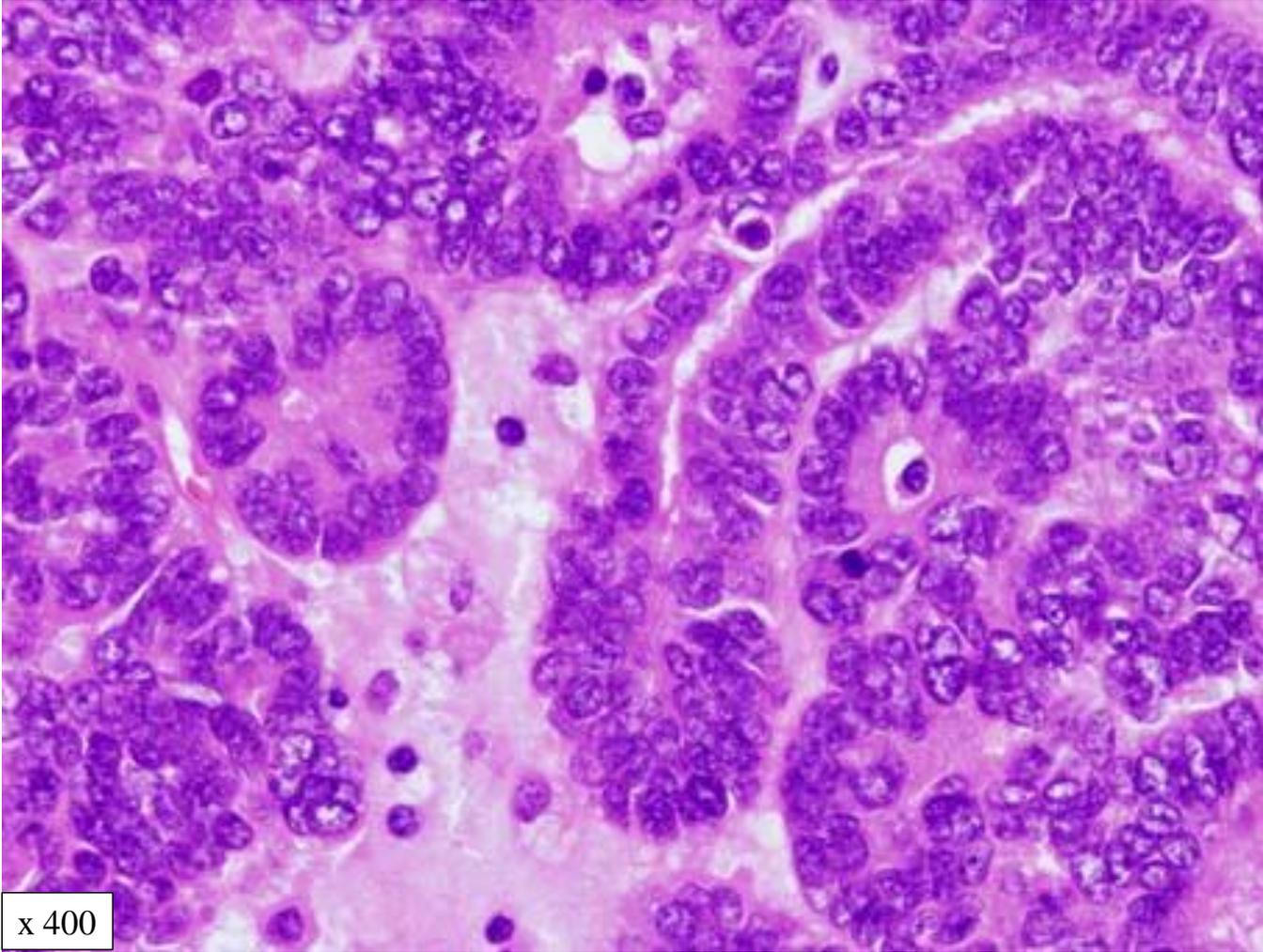
x 200

ごく一部で充実構造



x 200

間質の泡沫細胞集簇



x 400

高いNC比とクロマチン濃染を呈する腫瘍細胞と核分裂像